

(西之表市西之表9939小字納曾)

位置と環境

遺跡は西之表港に注ぐ甲女川の北岸、西之表市の市街地を見下ろす海岸段丘上にある標高約23mのところにある。

調査の経緯

1967(昭和42)年、地主の上妻紀夫によって発見された。地主の依頼を受けて、上村俊雄(調査責任者)、本田道輝、鹿児島大学考古学研究会、種子島実業高校、ラ・サール中学校等の学生のほか、西之表市博物館の協力を得て、1974・1975(昭和49・50)年の2年にわたり発掘調査を行った。

遺構と遺物

1974(昭和49)年の第1次調査では崖端に近いところに4m×6mの溝状遺構が発見された。崖端に向かって傾斜し、傾斜の末端に近づくほど、木炭や焼土が目立ち、土器にはススが大量にこびりついていた。炉跡と推定されたが、炉跡にしては規模が大きすぎ、土器焼成の遺構の可能性も捨てきれない。市来式土器を主とし、叩石、石斧、石錘などが出土している。

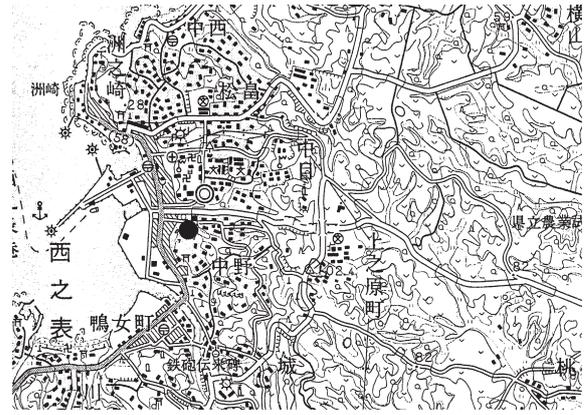
1975(昭和50)年の第2次調査では、種子島の考古学史上はじめての竪穴住居跡と平地式住居跡が発見された。竪穴住居跡は円形で一湊式土器のみを出土している。平地式住居跡は柱穴のみで床面は踏み固められていた。納曾式土器だけを出土している。納曾式土器は器形と文様の点で、西平式土器の影響を強く受けながら独自の文化を展開していたと考えられ、一形式としてとらえられるので、納曾式土器と命名した。石斧、石錘、叩石、石皿など多量の石器を出土した。

特徴

竪穴住居跡から一湊式土器だけ、平地式住居跡からは西平式土器の影響を強く受けた納曾式土器だけが出土するという注目すべき出土状況が認められた。

資料の所在

出土遺物は、西之表市教育委員会に展示・保管されている。

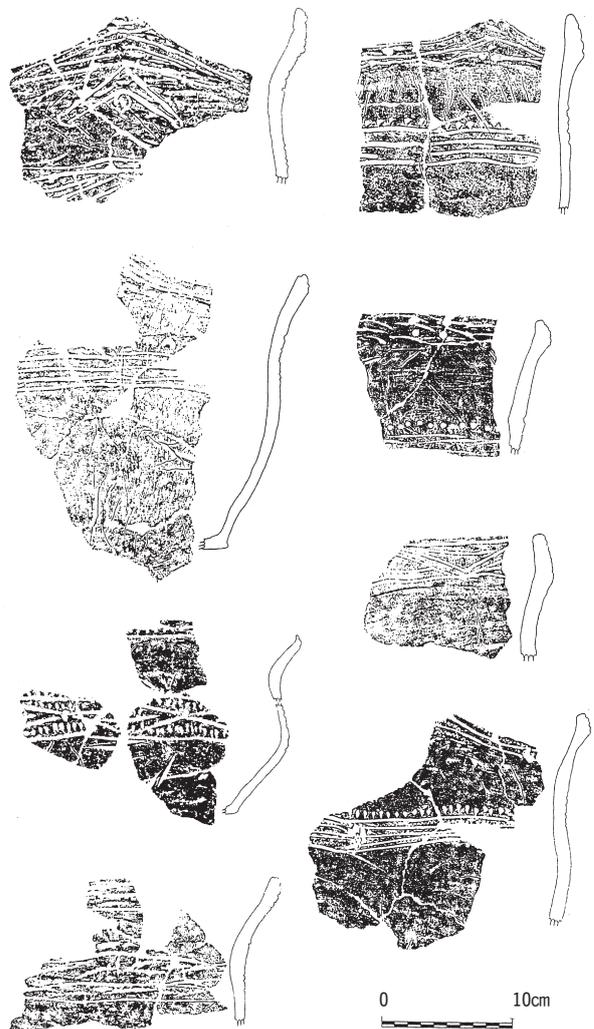


第1図 納曾遺跡の位置

参考文献

上村俊雄1978『西之表市納曾遺跡』『鹿児島考古』第12号

(上村俊雄)



第2図 納曾式土器